第９回　金沢競馬検討委員会　会議録（要旨）

日時：平成１８年１２月２７日（水）１０：００～
場所：石川県庁１１階　１１０２会議室

１　開会

○　あいさつ（石川県競馬事業局長）

２　議題　「最終的なとりまとめ」に関する意見交換・協議

○　作業部会長報告（西 副委員長 兼 作業部会長）

副委員長：　前回の検討委員会で了承いただいた「今後のあり方」の骨子をもとに、１２月１９日に作業部会を開催し、内容や文案について検討・調製のうえ、本日、作業部会案として提出させていただいた。

事業を見定めるための「ある程度の期間」について、作業部会としては、１～２年では経営改善策などの効果が見極めにくいし、逆に４～５年では厩舎関係者の疲弊感がさらに進むのではないかと考えられることから、３年程度の期間が適当ではないかということで、一定の期限を平成２１年度末とし、その間、県民・市民にわかりやすい具体的な数値目標を掲げ、それに向け、全ての競馬関係者が最大限の努力をすべきであるという形でまとめた。

数値目標の設定など、具体的な中身については事務局から説明していただくが、目標をクリアすることは決して容易なことではないが、関係者が一致団結して取り組めば十分達成可能であると考えている。

○　事務局から内容説明（資料１・２、参考資料）

○　意見交換・協議

委　　員：　黒字化に向けて、３年というのは妥当な期間ではないかと思う。明確でわかりやすい目標であり、県民の理解を得られるのではないかと思う。

ただ、３年という期間しかなく、細心であるのは当然であるが、ある程度思い切って打って出なければならない局面が来ることも十分想定しておかなければならないと思う。期間内において、ミニ場外やネット販売、他の競馬場との連携の強化等、それを実施すれば増収が見込めるというときには、基金の投入というものを決断してもらいたい。

これは提言の中にも書いてあるので、しっかり守ってもらいた

いし、これがないまま廃止ということになれば、残念なことになるので、特に増収策のスキームというものを引き続き検討していく必要があると思う。

事 務 局：　作業部会案の１６ページの中程に、「経営改善のための振興策等を進めるにあたっては、「基金」の一部を活用することも考えられる」ということで、とりまとめをいただいている。この部分を意に止めて対応していきたいと思っている。

委　　員：　作業部会には、難しい記述の所をはっきりと書いていただき、お礼を申し上げたい。この委員会が始まったときに、「黒字」「赤字」の話をするときに「収支均衡」という言葉が多く使われていたが、事業としては黒字であるということが重要であると思っている。今回の「今後のあり方にかかる提言」には、「黒字」という記述が多く出てきて､覚悟みたいなものを表現している感じで、気持ちよく書かれていると思う。

　関係者の意見の騎手の記述のところで、「２～３年の事業計画を立て、資本注入をしてモチベーションを高めてほしい。それでも駄目なら、あきらめもつく。」と言及しているが、それを受けて、３年という期限を切って、最終的には「廃止すべきである。」という記述までしてあるということで、今後、良い方向に進んでいけばと思う。

委　　員：　基金の状況から３年というのは非常に良い期間だと思う。単年度、それぞれのハードルを設けて、３年目にそれがクリアできなかった場合は廃止というのを決断すべきということを以前の検討委員会でも言った。

　ただ、改善に向けた数値目標、平成１５年度に１日あたり、１億２，９００万の売上げになっているが、この年度は５億円の赤字になっている。そうすると平成２１年度の売得額の目標というのは、これで黒字化できるのかという疑問がある。

事 務 局：　この頃は､売得を上げるために経費の方で支出がかなりあった。今は厩舎関係者、馬主に理解をいただきながら報償費を下げさせていただいているが、その頃にはまだその辺は手を付けていなかった。収入も上がるが、経費も上がるということで、結果的にこういう形になった。

　平成１５年度に「新賭式の導入」、「自動販売払戻機の導入」など相当の経費をかけており、結果的には、現在、あまり投資しなくてもその分を活用しているという部分もあり、支出を絞り込んで均衡を保っているという形である。

委　　員：　現状、１日あたり１億１，４００万円で、２１年度に１億２，０００万で、やり方によっては、十分達成可能だと思う。これで黒字化できれば結構だが､基金が県で２１億円､金沢市で３億円、

合計で２４億円あるわけで、万が一、廃止に追い込まれた場合の経費、確か１２～１３億円かかるということであれば、残りの１０億円について、３年間で売得が上がるようなことに投資することも考えていただきたいと思う。

委　　員：　１日平均の売得額の推移で、３年後に１日、１億２，０００万円というのは大変厳しく、たぶん点線のトレンドでいくのではないかと危惧している。したがって、どう開催を維持していくかということになれば、自ずと歳出をカットしなければならない。ＩＳＩＣＯが人件費の２２名を半分にするということも、もっともだと思う。必要な人員は確保しなければならないのであるから、極端に言うと全部の職員を嘱託や臨時、あるいは委託するくらいの大幅なカットで進めないと､難しいのではないかと思っている。

事 務 局：　歳出を抑制するという部分で、残った部分は人件費の削減しかないと思っている。試算は７名の削減という形であるが、状況に応じて更に削減数を増やすということも考えていきたいと思っている。

委　　員：　作業部会案としては、立派なものが出来て、言うことないと思う。後は検討委員会で作った提言を県や市がどう受けて、いち早く処置するかということだと思う。この中にも「一丸となって、不退転の決意で臨むことが何よりも重要である。」とあるが、明日からでも検討委員会の提言を受けて関係者との話し合いが必要だと思う。

既に「３年で駄目な場合廃止」という新聞記事も出たようであり、一番恐れるのは、ファンも関係者も「３年経ったら廃止か」という受け止め方をしてしまうことである。

これからをどうしたら良いかというのは、関係者と県と市が、「１日５００万円の売上げを伸ばすにはどうしたら良いか。」ということについて話し合っていくしかないと思う。それが出来なければ、３年経っても黒字にはならないし、赤字は年々減ってはいるが、現状維持で止めざるを得なくなってしまうのではないかと思う。

事 務 局：　提言の中の「不退転の決意」という部分については、「まだまだ金沢競馬はいけるぞ」という部分として受け止めており、数値目標も出していただいたので、それに向かって全力でまい進をしていきたい。

競馬関係者との協調という部分については、確かにこれまで事業経営は事業局サイドという分野が強かったのであろうと思う。そういう反省を踏まえ、今年の１０月以降、馬主協会、調騎会、厩務員共助会の役員に、３回にわたり平成１７年度の収支の内訳について説明をさせていただいたところであり、これからは関係

者一体になって考えていかなければならないという部分を強調したつもりである。また、役員だけでなく、全員が共通の思いを抱かなければいけないということで、膝詰めで２０人位の単位で話したいということも提案したが、「検討委員会の最終報告がまとまった時点で、その中身について全員に説明をしてもらいたい。」という話であった。金沢競馬は１月８日に終了するので、その後すぐにでも関係者と膝を交えながら話をするという段取りを今しているところであり、関係者とともに一丸となって取り組んでいきたいと思っている。

委　　員：　なかなか厳しい意見も盛り込まれており、とても良くできていると思う。作業部会の方にはお礼を申し上げたい。

この中では、３年間、場合によって最終年度で判断がつかないときには、もう１年の検証もやむを得ないということで、長ければ４年という期間があるようにも読みとれるが、その前段では、「期間に至らずとも場合によっては一定の判断をしなければいけない」ということも盛り込まれており、その時には、勇気ある決断をすべきと思う。

それから、これまでにも歳入・歳出についての努力もかなりされている中で、更に黒字化を目指すということは非常に難しい部分があるかと思う。そういった意味では、基金の取扱いということも一つのポイントになってくるかと思う。ただ、廃止の場合もあり得るということを踏まえなければいけないということで、非常に難しいことかと思うが、後悔の残らないようなスキームを立て、十分活用していただければと思う。

事 務 局：　基金の活用の件については、提言の中にもあるように、ある程度の投資が必要というときには、今の状況では基金に頼るしかなく、そういうときには、関係者も交えた中で全体のスキームを作り、その中で状況に応じた対応が必要なのであろうというふうに思っている。

委　　員：　この委員会は、スタート時から廃止ありきではなく、継続を前提とした議論、提言をしようというトーンできたと思っている。

今回の報道にしても廃止ありき的な報道がされてしまったのが残念であったが、あくまでも収支均衡あるいは黒字化すれば継続するという前提で、今まで以上に取り組んでいただければと思うし、この提言を説明するときにも、廃止ということではなく、継続を前提とした中での話であるということで、マスコミの方にもそのように是非お願いをしたいと思う。

事 務 局：　提言の受け止め方というのは、先程申し上げたとおりであり、そういう努力をしていきたいと思っている。ただ、ファンというのは結構、風評に左右されるという部分があって、報道の見出し

の取扱いによって、来場の数、あるいは売上げが随分違ってくる。その辺は、我々の努力が及ばざるところであることから、是非お願いしたいと思っている。

副委員長：　先般、有馬記念があったが、売上げ状況が６０億円を下回るということで、名馬を持って対処したレースすら売上げが落ち込んでいる。入場者数も前年比の７２．２％、１１万７，２５１人、大幅に減少したということで、金沢の方も苦難を強いられると思う。

日頃、事業局一丸となって頑張っている姿を拝見しているので、さらなる努力によって、ぜひとも存続に向けて頑張っていただきたい。

委 員 長：　意見をいただいた範囲では、この作業部会案は、基本的には了承いただいたというふうに理解したが、そういうことでよろしいか。

なお、実施にあたっては、委員各位からの注意を十分斟酌して、早速、来年度早々からでもこれの具体化に向けて関係者に働きかけていただきたいということを委員会としてはお願いしたい。

第７回の検討委員会で、基金残高が非常に少ない、あるいは、県の施設を借上げて競馬を開催している金沢市が、石川県よりは厳しいのではないかということで、「果たして、一緒にやっていけるのか。」という意見が出たことがあった。

委員会としては、それぞれ事情があろうけれども、共に黒字化に向けて、取り組んでいただくということをお願いしたい。

それから、県と金沢市へは、今日の午後、私の方から知事、市長に報告をさせていただきたいと思う。

３　閉会